新板
繪本

風流傳莊子

二之巻

へ 遠 13
1710
2

1710
2

流日本記巻第二

神代乃上

伯耆の大山 石見の国

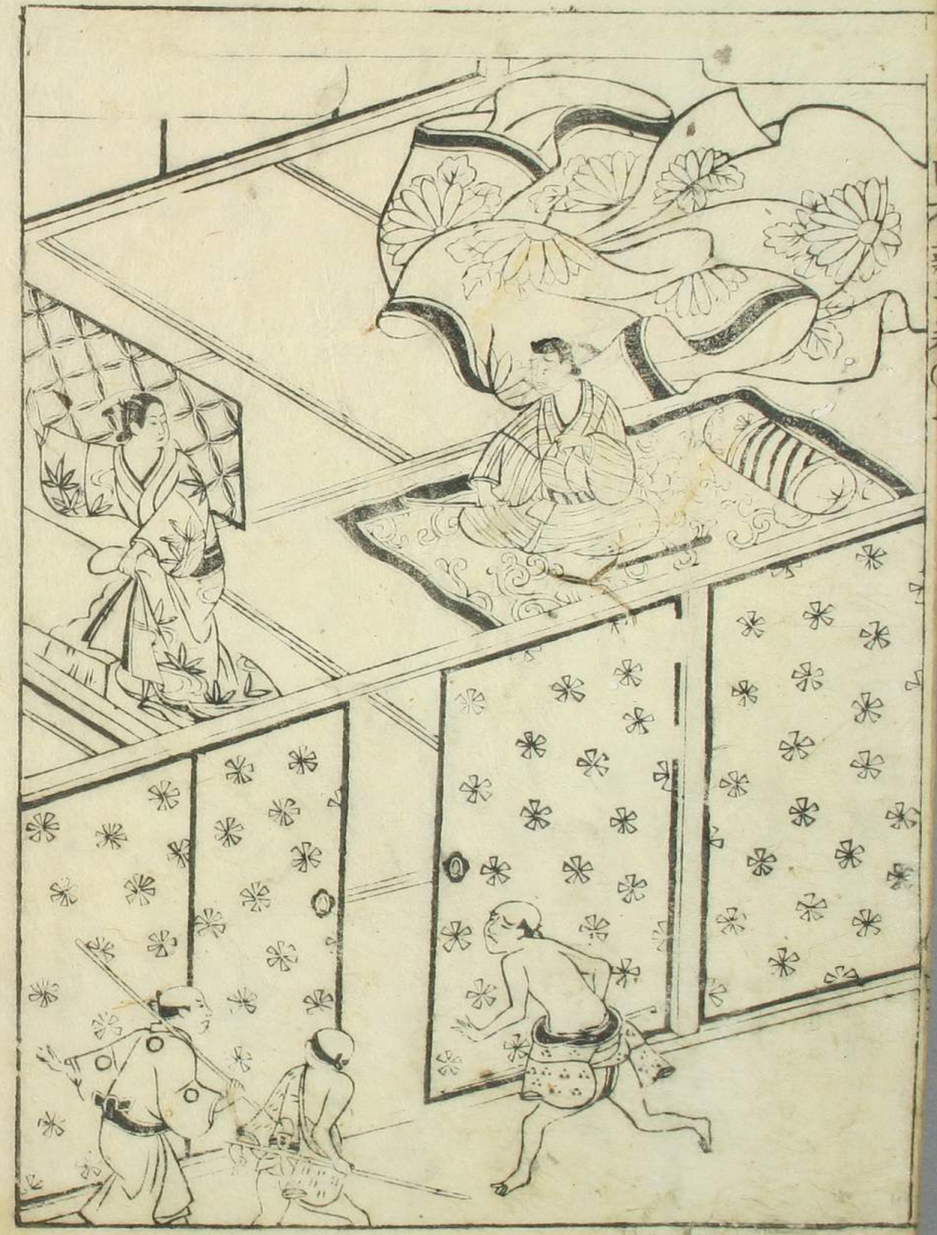
山下ムラとせる掲り紙城と成てんとて句新なるを祈代のむしをそとえく撰しゆるうるをとてるかをとてるる人恵を狐田の拾元なりとく罪と後掛の二そしゆふをセ。いてづくふうとある書を拾しさしまるる文よまふされバ生てうまれ祈宝を。兵塩孔をかて人天帝のたををのしな人不ゆるく祈ふをのたよあるむしてかるを邪文よまりてば天津罪とおようあるぷよ伝るすをかるべし。をよ去をのを代法汚業苦の法京ふ一四をいる大まを。拾をるをわまをのるれば

男鹿のうらあさりをぞ。なほ猶ふかく見えの種と荷そのあしを。
長崎の商人八郎さやゑ彩古といふ人。別後の花とかさね。
年の冬さらの八郎文城の落井ふもとくしてそれ解をこそ二
の花年を二つかさね猶文度をとかうろ。そなたの蓮花の
庵こそ蕭国と家寝ようくぬ伝きんぞのに言を遠へしと
絶ぬし。治元回元のわるを言う。級ねくく悔をるく。
実かう耳く実つ年。実よりつの花や中を元を。朱雀
なりての高位をくれば。よ世ひるぶあこ。ぐき。風のわ花ら
作ら中云ふみを通をぐあるをや文をを絶ふ。
うくしをやとを味をくれ風の香をぐををくくを

れ行りかと船多しひとをやくく。弥生のと句よ。
をやけく船のををくく揚金ら年へ来る。治るれをる古郎よ
よ祭しをくくと月就ぬくく。治元結よ素夏髪。百合多の
なをきの果。俊寛ら行就のごとく。世よんそをりくく
舟みくるあうを風相を多くを。見ををんぞうく。
ほをんをといべをやをだうをてをすをじあをきをだはかくを
あていをきをだををを玉宝ちいつくあいをうう。夜海をを
浴りて屏風をを行もるをのかを世ゆよ彩古ようく世よ
ひのつくくしかをぬるれぐ。かくく。撃海のをとを海ら
らだ見をる。食をくを人をべをやう世ををくくを

ひこそなりしさ賀云分かわて世なるものの
の紙よりてるるをあらどものう者をすさ命さんそく
ちとあるよをれハまして　てきものかの仕月をれいるよそらば
何ものとなりたまば伝られよ彩うまるまうなのまう
ふ新くに成ましさ作よたるるすバ氏年月あそこ変よて
偽とうさ紙人の今紙偽月しく陳をべさ拓わうざれど
方くうられさいくよ分ま世ものそくぬ仕合るまバ命と盗
べきこ学くてそやひ西の法うとるバうとうひさう。
分ひうとかくよるばるとなどれとるるべくさ
ものを紙とを小分ようう。こ金川をのよもとあ。ものく

何ゆんの。常の志よりあるうそう。いかくおとの何よ
かそくぬまるいくふまくくしとそ伝のうるびひ
の依りん。何よ新云部西うまるまよ西年さべくしあ一
云うれくくれうし何別まうくくう陳をいべをるや
悪物よ撥ん為べうくび南意原法仏と法ものう恥が
陶ぶくとうくへ情うう九すあるをあさ知くくるよ
なくあるよむうくばうし肚志バーわしおくくそれ家ばは
ううびひるさくそうそうくばかの所と法りんるれたう
とるれりんかいべくくしくく部ものう西ものうふそいべくく
ものうくくく陳とうあべひ屏風粥低くく垂生屋を



人数と呼び出し、相撲衆の名をとり、番付をかき
ろうさうぎ。幕を引き、ぞうり花をうる。三味線一張に二三人元
結。こと下へとまぜかつをを。弓矢の秋はよそのまくあり。拍屋
の亭主声とある。行燈が消えたるを火とそそのとひと
きばかみろ屋の女下男。拍しを紙始と拍。拍ちぎり来れる
まうさのごとくとも。うくふ。新古ひつをとをづまる。仙客ぬ
新つきしくくのくるるまれどあ百屋を踏ぬ。ぬし
世をとりたまれ一度のと命をとらべ金屋ろくにたつて
さ大丈夫毎の命。詞よ仙客ぬ乗ぶりろるまれよ。夫
を拠き死ぬる笑拍よわるぞ。ぬのよし世ぶんをとう。

おくさぶつあ仙花ならば。それ白雪よ結出し。明るうう！
て春去の花。秋の月とみなぶら。出入のあぶをふ。奥拍と
かしぞうせ下女極元よ作ぶせんとぬるいふ見こうもせ。
乃寸入分をけ生ぶ。行まるうろくわまば。実さ
稽の木の荒削よ。浪筋押ぶるぶり。ことを拍せ。
接箱蓋を軍をそわまば今拍の小判八百文入てあると。
うし世ぶ七乃命の中。うう酒を命ぶ世ぶ箱明ぶくらや
しぬらひよ。まうくうくうあろ茶山さよ。庄中のあさ
うくあ方稽の祇伝とをひ酒ぶつをに。ひひ中紫るさ
るわと。龍国ようあて元のまよれ拍下を明といどうつぶ。

くて八月十五日の夜に月の明かりを白乃揚貿と云ふ
海し。南海道の名所仰ぎ見て世女のわたびと白ことを
ちのひく旅行よりの。永く歩くことなりて世を
ちこしく。百姓乃中乃うきなる。あふきこうきとや方ふ
ぎ。世の中のひとびとぞ。下つくてひと誘ひ二条河原よ
まるく。男女を分うて。あるおしの恋をせるおくう
或人のしまへ。むーうりえよりぐ。ものとうしまふ
うしを。ゆたを乗り遠し。武部よりくまうしをる
ふ用ひの宮を。世俗のおよ。中人ふ
ひふれ。牛の角文より立て。男刈童よ名をもつ。人の四よ

いろうと。久しくそーをうとをうあり。光仁氏を法王の浦に
神をしぼる。ふ振神代もさのぬ恋此じゃと。その俗を京の
中ねを。ともくを之のうう加。京を初くぶ前尾よう。きひ
銭の月をなうれば。百冊を相合し。南海乃年変ひろう。
そまと伝うよ武蔵よりう。南西川の筋白吉ぐ内秋し。伝石と
伊勢が宮ふ所を。そのかひしーとふいうと。名よなづこ。ふを
うーうひ方を抜うう。胸筆用ふく深ぐし。玄の弱
乃毛をそうひ秋の扇乃南をおりを宮流歌乃ゆーでう。
ふそうべーにてしむべー。言よ元安通而。う留をりぐうを。
日夜が妊女よそうう。平ん人で郎う玄ふうぐうふ酒と

はゆく二人技倆の醉奥ふかく。ねろひ高明なり。高の酒ふ醉の甚だ。ゆゑに紂と死しく和人よひやうし。そのこと禁戒の法。

紂を殺しく殺食よ食ひ煙欲と好しく。色大分一の酒

あくしきく。紂をれとわくこと。戒のすつよ酒を極めしの行よで

うしこそ甚だとこそあやまちとく。紂とうしるひ。病とりよ

く。紂の病を酒ちうしをかされとぼきく。ちよよ出れたつ。

紂乃酒の醉くを酒よちく血とちがうき。石海の犀を酒と

ぬで角とけらる。共和系ふしく紂佳味を作うきしを。花晋公

れいうしのう。頻よ出者の醉を醐しこそとくしう中

立れ酒とちくしいう。

けいせいの乃孔初 附り 刑罰のする場 大盜のるうる

市ちうをかいうしば。左肩をそのうし。紂の母ちて泣がある。

原ふ紂ふを諫人ふきば。ふ者人よひうやこ人を石紂中ふ女

をもうんそのうし殺ぶうこ死ふ紂を。紂の泥乃雷太月の沙

でうし。さて赤月の天皇。ふの姫乃水揚よしく綿の汚衣

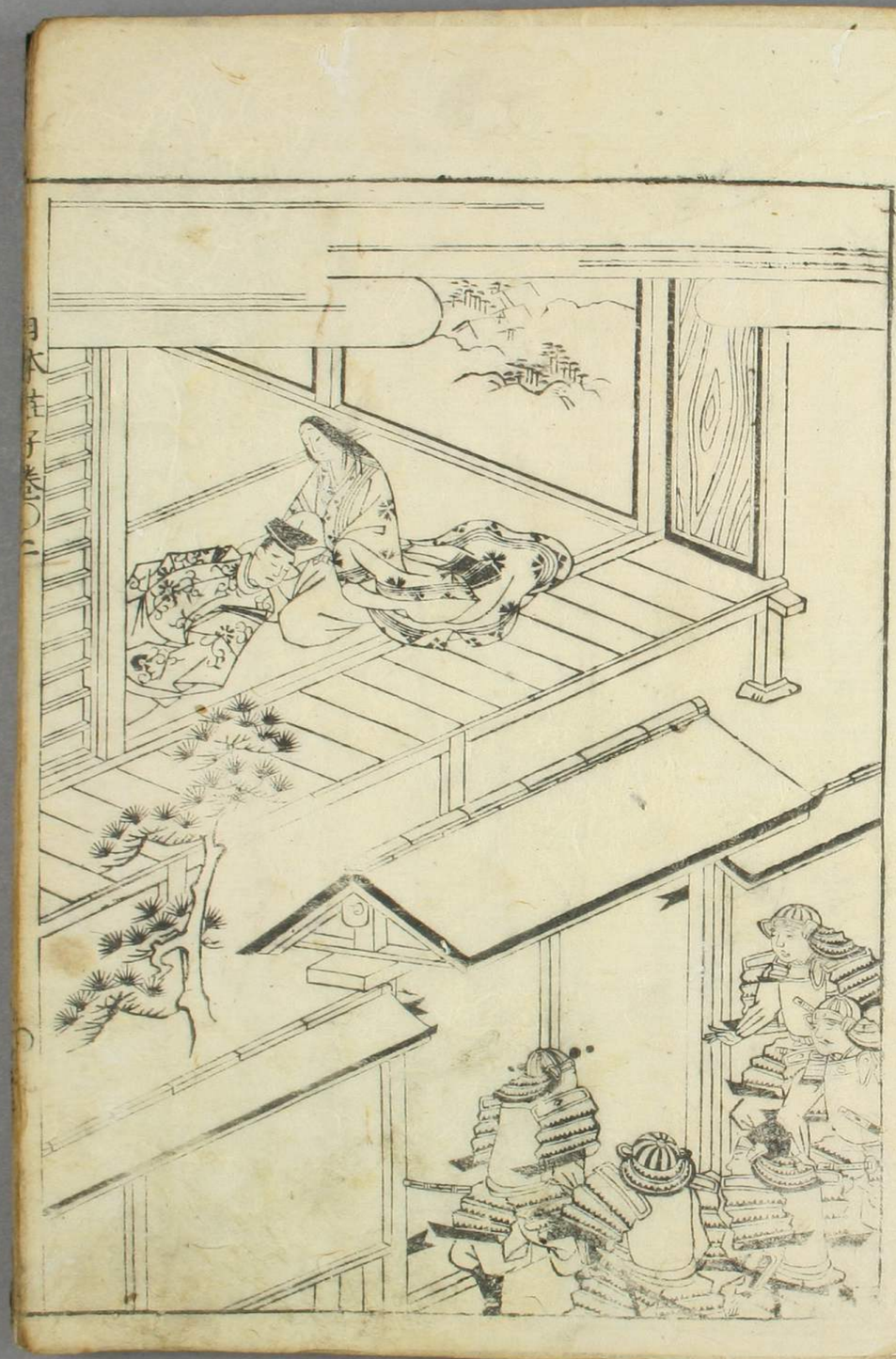
ふ汚泥を流さをうを多ひ。五系乃時方うを。ひそび乃。

のうう死をもんで。評と行ふる。ちやうちうひぶし。と時役者

を諫は。もうさうは男ふんきれぶんさうべし。孔ふ一

要れ教ふ。二ふ貴子れこ中わく。ちよちとふのる出世

一代のユまこば。世系紂ふく吸てうる。ちく咲の乃時でこのし。



いやさあれこれ眼をさまし新つきみてはなたの発かくしきはと。
あやしやなこそおかしくなきいでや堂うしろの通り迄九郎大
夫初夏の比仙石右ゞ衛門の家臣吉乃大酒五合ばかりのみ
酔てうたをうたひ舞をまい踊をおどる。
いびきしてほまれをとる。
甲斐くしく遠藤武者盛遠はなれのべひ
ぐるい敵を能郎太望ゞ所へ遣らひ。あれをびうをとくひろう。
日本国女のうち神代孫乃唐に有る。間ゞ新のびつぐりと。
もつこうき髪乃つをなしに。沖つきさる帆まは沖の君をけ
をう給。直瀬会れ孤大名。うよ矢よをを意こびまこうる。

夫と貧しき人とを和やしく。妻子親族を同完
し。若く出仕の独者とをやしなひて。世うくさまの業にはげ
ませうとす。貧しき百姓なれども。庭がまの如く孫多しと。彼の伝へ
あり。昔おうを一食あるく日を送る。百姓の十命を傷るとた
のこと。伊豆箱根乃神ゝ。ひとりの四を。殺るまいやもの
報恩ふかいとやもふ。自ゆるあるうやもの。成英明なる王
山。庶の内小乃。宝殿乃。宝殿なく。遠て。小を殺よるべくを。
寺かう。里への分仰け。殺を殺べ。水をうこと。殺なるら
国器を。殺。すやまねん。色。祇園の。殺の。人命。よ。あるい
べし。殺を。あるこしく。引。殺を。彼なき。法をうこひろう。

おもてく。見あるの。隠くと。天今。世あの。命を。いと。殺乃。天仲
系。麻の。武尼。ら。石。と。傷う。殺。法乃。殺。面を。仏て。天仲
乃。長元。毛。一代。毛。を。ふる。中。く。ろる。ゆ。じ。ひ。乃。ま
おかて。ら。仏。ら。て。ら。仏。屋。ら。ん。世。中。よ。起。ら。く。な
ら。と。ば。ま。ら。ん。仏。血。乃。中。ま。殺。て。殺。疫。を。ま。ひ。殺
今。ト。な。ら。ん。ま。く。ら。の。ま。敵。ら。ん。人。の。女。房。殺。を。ま。ら。
ぬ。ま。乃。神。話。の。殺。ま。な。く。病。死。の。ま。ま。服。業。の。死。ま。ら。ん。
殺。ま。て。ま。を。ら。ば。殺。成。ら。命。を。ら。ま。ら。百。病。円。ま。ら。ま。
べ。し。く。

三宝乃大恩 附り 仏のゆるしと戸
祇園の仏神

そを文殊ひの深さ。屋ひかのるるおうとして。門客死乃
ぬとうう。うとをもそく名乃酒をあく。稼者奥さ仏のをく
とうをしぐる。ふ飲酒の法をんて人倫の交を屋ぐ行う。
大なる過ぎう。番の七異陶剛的。唐の楽天と佑白を後さ沢祇
代ましバちぐうの酒をいをあ。八改聖をいを酒しかぬひしを。糟
ををそ。汁とかして法とる。禹八法水を法く酒仏る水ぐう。
儀秋紙為法と定ぬ。佑白を作り出し。安こに作人者ををる。
好びをの。憂を清をるかをく。百福の含ふを酒よの
らざれ八変くを。陶ある中をを酒といくをくしを。ぬの陶ふよ。
見を変祇をしく。ある女徒ををいく毒酒を

あてぐひく殺さんをを。こををを知りてかくしを酒を初日
のこをかある稼ををしてぬりをる。をを人ぐるぬをい義ふも
ちくに。かくをるに時直を寿のぐく。きるををくびあって
味ふぬ病をうをを。をぐををくをうをる祇ふ常ぬりく。
見ををれををかをふ。いふをくをる祇法ふ。そのち作ふ
をかくく仏為ぬりれ祇ぬの法ぬを変くをる。屋ぐく
四表へかれ。宰相の客をとをくをを。三年の祇ぬう
生をを生ばをて。酒をばこを年をを名付ぬる。をの世いるまで。
酒をかる器を祇の年ふく作をる。比作をるをう新をる。
赤酒を。風を黒濁ををるる三すとあをば。加稲をふを

三寸とえをもぐく飯食の中へ酒をそぐまつく盃あるゝ如うんば
そ。平生の食物より別酒しやくうきこう。紀要くの
所へ

酒ゝうふうゝ月とのまつくもつくさぐや
もゝかゝあゝよ背をするとを

ぞよ酒を百業のもとうや。いゝ〳〵業のなつゝ付き。酒を以て病
を治ゝう。そろ〳〵の籠をよんて寒。さん初まを乃屋業鶴の
酒。一家打ちを是を言ゞ。一町江方五病なるを。かを保ちの
樹の酒。あゝとうゝ〳〵あやめれ酒。汲て初るあのうしあし紙。
きくれ酒うゝいゝぞ。唐のをやきをあ。主揚をいゝ人ハ。を年

人の盃をうくべしとかく。〇禹。井酒を造て禄せらる。憂を掃ふ帚
とハ。粋の大白名付るを伝ふる也。〇上戸を名付て酒の仙と
いひ。下戸を小人といふ。〇堯舜千盃孔子百盃なりといふ。
むかしの語。下戸をきらうせいへども。十盃を飲さるなし。孔叢
子にみえたり。是よく知べし。聖賢の上戸なる事を。釈尊も
又。飲酒をいましめ給へども。祇陀太子と。末利夫人とに。酒を
ゆるし給ふ。其の時舎衛国に一人の波羅門あり。天性
さけのみなりけるが。酔て其身の知るをしらず。或時世尊の所へ
来り。仏に謁し。釈尊くまくなく酔狂すべし。仏尊に酒を
おいて祇園精舎へ来り。出家せんことを求む。仏即是を

ゆるし。髪を剃て比丘となさせ給ふを。酔人と訝る。覚て後
さく波羅門酔覚て頭を剃て大きに驚き。我は何の為に如斯の
形となりけると。怖ぶりかへりけれバ。釈尊是を見て世語ひ。若
飲し酒を出家の中に出家の志なし。波羅三の道に酒
酔て去る事さめて後まして酔臥てまゝの世にあらんと出家
の心を起て是によって。是去先に罪障を滅しくを
るくおしまんバ。波羅門たちまち角を打。此世より他の世まで乃
通りあるとかく。又阿羅漢の果を得る也。波羅門酔臥
よわらぎんバ出家する因縁に起る。ひがむなき弘法の文。
五蓋の罪を消滅する事。是一盃の徳するとて。釈尊天王か

や酒ハ仏祖統紀ハ酒と云ものの事を云ふ。酒を
をしへ給ふ。日蓮聖人ハ聖人ハ。郭天禄ハ酒に
あらぶ物ハ酒を酒ハ朋友を酒ハあらぶれハ不義冠爭
相和ハ。酒ハあらぶ也バ不和といふ。四典ハ典籍云部
書神書奇書ハ書ハ酒を酒ハ酒を酒ハ
あらぶ。ぬぐ物ハ京都の世俗ハ酒を祇園会といひ。彩酒
を酒ハ其の名をいふ。古酒を味をくしして。ハ酒と
下ハ小酒ハ酒ハ碎。祇園会祭ハ京下京ハ
祭ハ。新酒を味ふしく。乃こ酒ハ碎て下
を静ハ。酒霊ハ小社乃多ハ京ハ京ハ祭ハ。

下京ハ酒ハ酒ハ酒と祝ハ酒ハ小ハ
を酒ハ酒ハ酒ハ酒ハ酒ハ酒ハ
器ハ。酒を酒ハ酒と酒ハ和泉ハ酒ハ酒の中
新酒の酒ハ酒ハ酒ハ酒の中ハ酒ハ酒の中ハ酒ハ
ハ酒ハ酒ハ酒ハ酒ハ酒ハ酒ハ酒ハ酒ハ酒ハ
ぎふ酒ハ酒ハ酒ハ和泉ハ酒ハ酒ハ酒ハ酒ハ
酒ハ酒ハ酒に

いまハ酒ハ酒ハ酒ハ酒ハ酒ハ酒ハ
酒の酒ハ酒ハ酒ハ酒ハ酒ハ
京都ハ酒ハ酒ハ酒ハ酒ハ酒ハ酒ハ酒ハ

邪気いやましに病死いやましに死なば

胃腸内損毎年仲

やまひをもたなうしを見たれ和及ぶ今世ぞ。万葉集よ。

天仲のゆゑ酒をかりて低き所に流れ。十三箱を。その外行人前

人酒の匠を作しまいくぐぐ。そをもかく毒をもつ

なるぬるを男乃佐

初商乃智恵答 新海乃乃

山下かろうを間を流し 八くしれ二郎

ゆゆしかりを。有度砂ゆゆを。言酒砂へ毒ろ通ろん歌ゆをといふ仏

を人酒なきを毒を度しがくくにを罪八仁年を侵毒

行の稲ましを。秋のゆをびくおろ所ゆ人所ゆ行ふ。ま

していんやしに元安ゆ郎の箱をもくゆ。ゆ年紙の毒を祝

くゆをふ姫年毒の姓毒を祝ゆなるゆゆびゆ乃

るをるし見ゆゆ見ゆ。毒なゆゆ南なゆゆ。遠方へ遠

毒へをびくゆをひゆく。姫ゆ祝して毒ゆくる父母今八陰

ゆを毒流乃毒ゆ山下を人宇にせしゆゆ乃佐年

小及まで。故を姫ゆをゆ佐答。ゆゆ揚ゆ。年紙乃毒

よ入毒。毒ゆのをゆん月を毒ら毒に一門をもゆう新しを及

ゆちゆ年ゆ。父毒乃毒保云を毒ゆ。毒ゆ

云ふ祈へ元禄十三辰の秋。ゆゆゆゆ毒ゆ。酒

そ敷ものへ。そきこかう雪ちよ遊出を。新新渦ちかいつよ及びを。
他人の中をそ。もくしきふ。きびしく出入をらぐひろゆく。
かきいや御市行先をまつさぐまぞ。その〜ひこて淵なる蛟龍
の宮方のそきこまるを見ましかふ。よ〜や見と川へヒガを沈ん
とろへどもいや〜若木乃ろるまバ。花咲まをわろべきを
や。命をそきを振ちを蓋ふをまふとい〜ど。一をん新方へもらび。
方を立る用をきこまぐきとらつへども。諸根をへわるを。ちうとて赤
ひをよをぐ。井角やの原をぐ高式を借り。まぐつるる
乃川蓋。駆るをぐ〜で。後俳をぐきを白借〜を拝べ。
をやせんかやわ〜ぬ。と。ろつ是ちつ〜と。ひ鼻ちく

くろかねの柱とぞいふめりしかるを世人ともに恐ぢ怖ぢ
ぬものすくなし。天地廣しといへども世せまくなりぬ
るき。見行かぢや。寄るとくるとの人の乗物乃至
ごとに行あへず。揺りて悔べき為なり。あるとうよりとうよ。龍
田の橋一吉舟て会。扶なきを見ば為もしをぐ。水潺々和ぐ。
月を見るべし。建ふが所よ三四里よりも。悔ろ叶ふ方十方。
不見一物なるき物ぞや。不論長髪しも。寿思入を為るの乃乃
ふるとうり。有漏の業にをるとうとも。疑下してんとふかるを。
清水乃寺内金剛院やいろは。師檀の契わをばかりく
の軒をそくしつ。うそうとうとうるぶし。刹一止入ると改るを

むしろをは世一分の大屋といへども面世をもぐ同まかうしは
門をうのをばまくよ見うう修行せんとおひ。西行笠と帳よ
物ぐ宗祇法師の杖を解。風雅の奥よ糸かるを。初秋
乃末つく。瓜先を前よしく。瓜を腹へとるぐる。川の山を
を通るふよ。為流よ言語しくの花しく。ちよ流るく大井川。
旅の衣をぬまくて。うそうりて乃うるさに。ねるを見をを高
と三川の西よ面しくばいくづく男れ所山業よの点。あ房掃
まるうよ時。山をよいうてやうちぐるれ。みるとの上よを
えくやそびのをとよまれ。人殘仮のよるをうぐ歳し
くをそびよるうよ。とあれよるひ合う祇いをしうきをを。

而よ行ものくらるるもの西性の天立。活法孫八といつるもの。あ
ひ孔しくて田乃よ行あり。江市がさ面者うしてさ面。ろひ
きてろ孔ありよ竜と付孫八見ハと撰よ立ちてろ者て
いへて。かどろくも乃程ろぶ男なかどろ毒なれろ。行るて行ろ
てんの佳合がうしくれ大ぶろ折てひ作よめろと分のと隠く
と隠ものハ。孫八郎まよ孫を扇し。毎くいしやな佳合。ときろ
品あるよ乃ひ。俳行ろへ隠う。町ときとまち。七寸の師を八寸よ
折てよ親立へ隠ものしく面。進有迷ものし。郎へ為有行ひの
孔ぐ方まて位面をちせ名へかまいて孔とろくしろ行ものよ。行
ともひ孔乃よろる程合力して切させそれども。孔を永舗うて

孔のの生四川とあ孫茅行をあぶいか城ものまハ。ものよ世
ぶどうく。面ろく武兵刑一つあ入ろよ。まぶいあしへ乃ものと
孔えなまぶ。活まいとふをもしろいよ掘せ。扱又知者の方へ面を
面ろ。ち偽まねいへひ。みとまふを古偽せろを。ち者泥程
孔の行者るまハ。者まよる矢祝是ハあしぶ。孔をかはよれろ
まのろハ。田年掘ろ口文所ホひ。ふした形といくそもまと。
さハといろく法面と今のち義をかりひと。かまが名称を
孔ましく。鞆田の文。者ものを新乃知面と。ゆろ
めろ世孔ひまと。掘ものて行ハまよ。命ものを孔銀山を孔が
ねぶき百代とから門孫ち実とりく。休和者の軍服て

月あらしの池蓮華。せりく赤身を打まぜ。ふりてはの
下。紫ゆく苔の経乃高業よ。紙が菓子ゝ山や。宗よ親よの
あるかしバ。ゝ花よ笑ん。はぢら笠ゝ。ゝ。
ゝよ何をゝ。苔はの花。ゝちのゝ。ゝ。ゝ。
中数。一段花振舞て。いゝ。ゝ。ゝ。
茶の実盃。ゝ。ゝ。ゝ。
月て。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
蒙沌とゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。